学生研究報告

情報保障の質的向上を目指して

しょうがい学生支援委員会
情報保障デジタル活動グループ
（25 年度コアメンバー：井堀直向、串元嗣、梁谷恵美、津川実夏子、重田あかね、友松真紀子、西尾真由子、山本愛美）
（指導教員：大倉孝昭）

1. 問題設定

本学では、聴覚しょうがい学生への支援として、ノートテイクという情報保障が行われている。これは、講師の発話をノートに書いて、聴覚しょうがい学生に授業内容をテキスト化して伝えることを目的としている。ノートテイクは、紙とペンがあれば誰でも簡単に始めることができる反面、情報量が限られることや、文字の見やすさが問われることなどが問題となっている。また、ノートテイカーの不足により、ひとりのテイカーにかかる負担が大きいという問題もある。

これらの課題を打破し、より充実した活動と情報保障の質的向上を目指して、最新の情報保障を行っている大学へ訪問・調査することになった。

2. 先進的取り組み事例調査

2. 1 日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

2012 年 12 月 1、2 日に、愛媛大学で開催された日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウムに参加した。このシンポジウムは、PEPNet-Japan が毎年 1 回開催しているもので、多数の先進的取り組みが発表される。本調査研究の最初の取り組みとして、全国的な取り組みの概要を知ることができ好都合であった。

2. 1. 1　分科会

我々は、4 つの分科会のうち 3 つに分散参加した。

・分科会 1「基礎講座：愛媛大学障がい学生支援体制構築のあゆみ」

ここでは、聴覚しょうがい学生が、大学へ入学し、講義における支援体制が整っていない中、当事者を中心とした学生の動きにより、現在の支援体制が整っていく過程が講演された。最初のきっかけとなった学生の動きは、当事者が特別支援教育専攻の学生に呼びかけをし、サポーターを集め、何とか授業にノートテイクをつけることができるようになったことである。しかし最初は、週に 15 コマすべての授業にノートテイクをつけるのは難しいという現状と謝礼金の少なさの問題もあった。そのような問題に直面し、当事者とサポーターの心理的負担が大きくなり、お互いの間にいつの間にか負担感・申し訳ない気持ちが生まれた。そこでお互いに支援システムの必要性を痛感し、今の大学の現状と他大学の現状と聴覚しょうがい学生に求める支援と、サポーターと当事者の声を要望書にまとめて副学長に提出したのである。これがきっかけとなり、聴覚しょうがい学生の存在とサポーター学生の実態が明らかとなり、「生涯学習支援研究・調査委員会」が発足、大学の問題として、動くようになったとのことであ

る。現在の道のりは長く、当事者を含む学生の取り組みが積み重なってここまでの支援がなり立っているということが分かった。

ここで、愛媛大学の現在のしょうがい学生支援について述べたい。現在は「障がい学生支援ボランティア」という体制がある。これは学生が主体となっている団体であり、「障がいのあるなしに関わらずすべての学生がより良い大学生活を送れるように活動する」という大きな目的に向けて活動している。この団体は、聴覚しょうがい学生のみの支援でなく、肢体不自由学生や視覚しょうがい学生の支援も行っている。団体の主な活動は、①支援学生募集活動、②各種基礎講座、③バリアフリー調査、④学生代表者会議、⑤意見交換、⑥他大学交流である。

・分科会 3「見て学ぼう！　みんなの書き方・打ち方」

(1) ノートテイクについて（宮城教育大学と筑波大学のノートテイクを行う際の工夫）

ノートテイクに使えるペンは、利用学生にとって読みやすく、支援者がスラスラかけるペンを使用する。文字の大きさは、均等に真っ直ぐ書くようにし、A 4 の紙一枚に 9 行程度、一行 13 文字程度を目安にする。授業者が資料読みあげ時はサブテイカーが「読んでいます」と声掛けをし、補助資料に赤線を引く。メインテイカーは“〈よ〉”（読んでいることを示す）と書いて利用学生に伝える必要がある。「つまり」など、まとめたり、結論付けたりする言葉は必ずテイクする。サブテイカーの役割は、繰り返し使う言葉の略字を作り、利用学生とメインテイカーに伝えることである。書き損じた場合は、利用学生が何を書き間違えたかが気になるため二重線で消す。あいまいな情報には“？”マークをつける。利用学生が、周りの学生と共に教室の雰囲気を感じ取れるように配慮する。

・分科会 4「解決！コーディネート現場の悩み」

(1) 聴覚しょうがい学生への入学前の対応（群馬大学の事例）

聴覚しょうがい学生・保護者・教員・聴覚しょうがいのある教員・手話通訳ができる教員等の関係者を集めて入学前面談を行う。面談時には手話通訳等を行い、聴覚しょうがい学生に情報保障を受ける体験をしてもらう。大学生活の手引きを作成して、聴覚しょうがいのある教員が自らの経験を踏まえた的確なアドバイスを行う。また、在学中の聴覚しょうがい学生と面談する機会を設け、先輩学生が大学生活全般についてのアドバイスを行う。

(2) 支援者の募集・養成方法（関西学院大学の事例）

学内ポスターや HP の掲示板で募集。教授会での教員への周知やテイカー募集の呼びかけも行っている。情報保障活動がどのようなものかわかりやすくするため、紹介 VTR を作成し、講義やオリエンテーション等で PR を行い、養成を行う。養成方法は、職員による聴覚しょうがいについての講座や先輩学生による技術向上講座を行う。また、シフトの組み方を工夫して、新人学生とベテラン学生が一緒に組むようにしている。

2. 1. 2　全体会

特別講演「高等教育における障がい学生への合理的配慮について」

この講演は合理的配慮には、何が必要かという内容であった。印象的だった内容が 3 つある。1 つ目が聴覚しょうがい学生の支援をすることの意義である。大学という高等教育まで進んでいるしょうがい学生は、しょうがい者のコミュニティーにおいて重要な役割を果たす。今まで聴覚しょうがいの方のコミュニティーという発想がなかったのでとても印象的であた。

2 つ目が情報保障での保障量の割合である。本来、聴覚しょうがい学生も 100% の授業の情報を提供される必要がある。しかし、パソコンノート

テイクの連携入力ですら、80%、ノートテイクでは20%の情報しか得ることができない。またテイカーが休んだ時は授業を受けることができない。テイカーを置いたから終わりではなく、与える情報を100%に近づける必要がある。そのために、パソコンノートテイクの連携入力では、残りの20%を埋めるために教職員、一般学生の歩み寄りが必要であるという考え方である。

3つ目が情報保障の範囲である。ノートテイク、パソコンノートテイクは普段の講義だけである。しかし講義以外の学生間の情報も大学にはあふれている。単位を取りやすい講義、先生の話が面白くない講義といった情報である。これらはシラバスを見ても知ることができない。こういった部分まで情報保障をする必要があるという示唆があった。

2. 1. 3　大学紹介（パネル発表）

情報保障の先進大学が自校の特色をパネルで紹介していた。その中から、同志社大学、日本社会事業大学、愛媛大学、千葉大学、日本福祉大学、筑波技術大学に聞き取り調査を行った。メンバーによる前夜の打ち合わせにおいて「本学における問題点は何か」を話し合って整理し、観点を絞ってこれらの大学に調査した。

・観点1：情報保障の種類が少ない（本学ではノートテイクのみ）

ほとんどの参加大学で、ノートテイクとパソコンノートテイクを講義や学生に合わせて選べるようにしている。また支援学生の数もかなり多いことが分かった。本学でもパソコンノートテイクとノートテイクを併用していく形が望ましい。どの講義にどちらを使うかは、本人の希望を踏まえて考えていくべきである。講義で利用する視覚教材には、学生サークルが字幕付けソフトで字幕付与を行っている大学もあった。本学の場合、ビデオ教材に字幕はついていないことが多い。これらの問題解決には、講義を担当する教員の配慮が必要である。

・観点2　支援学生の募集方法

ノートテイクについてのビラを作成し、少し強引に配り、印象付けることが必要であることが分かった。また人目を引く工夫をしたポスターなども効果的であった。イメージの湧かない学生のために、入学式などにパソコンノートテイクを実演する、聴覚しょうがい学生本人が支援学生募集を呼びかけるなどの取り組みも紹介されていた。これらのことから、ノートテイクの様子をできるだけ多くの機会に広報することが効果的だと考えた。また聴覚しょうがい学生が自ら呼びかけるのも良い方法である。

・観点3　ノートテイカーの育成方法

ノートテイカー全員が参加する練習会が開かれている大学があった。練習会には、ノートテイク、パソコンノートテイク、手話練習会などがあり、レベル別に実施されていた。またPEPnet–JAPANのホームページで公開されている、音声教材を使って実施している大学もあった。練習会を行うことによって、テイカーの成長と、支援者同士の仲も深まり、より良い情報保障につながっていく。本学でもミーティングは行っているが、連絡だけになるなど、内容が不十分であるので、このような方法が効果的だと考えた。

・観点4　コーディネートの方法

基本的にコーディネートは、しょうがい学生コーディネーターの職員が行っている大学がほとんどであった。職員の役割は、ノートテイクのシフト作りや急なテイカーの変更への対応といったような内容である。セルフ・コーディネートを行っている大学もあった。これは、必要な支援を自ら確保し、「自身の大学生活をコーディネートするのは、しょうがい学生自身の役割である」という考え方に基づいている。実際にはノートテイカーを見つけるための活動をすること、ノートテイカーとの連絡や支援方法の打ち合わせ、教員と受講

上の配慮についての打ち合わせ、支援についてより良い方法を提案することなどが行われている。ノートテイカーが見つからない場合は、しょうがい学生支援センターのボランティア登録者に依頼したりすることも可能である。

本学にもシフト作成やテイカーの連絡調整を担う専門の職員さんが配置されれば、一層心強い。一方、当事者が自ら情報保障者を探すという活動も、自立のためのスキルとして重要であることが判った。

2. 1. 4　まとめ

今回、第 8 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウムに参加して、情報保障組織が立ち上がるきっかけは学生が作っていかなければならないということを痛感した。多くの大学に聞き取り調査をし、多様な取り組みを知ることができた。今後の本学での情報保障活動の良い参考になった。聴覚しょうがい学生、支援学生、教員、職員が大学全体で取り組むことでより良い情報保障ができると感じた。

2. 2　札幌学院大学訪問

2013 年 2 月 13 日、日本学生支援機構障害学生就学支援ネットワークの拠点校である札幌学院大学を訪問し、先方で企画していただいた懇談会に参加した。札幌学院大学は、1999 年に聴覚しょうがい学生が入学したことをきっかけに、翌年から学生 5 名のボランティアによる情報保障の取り組みが開始された。支援組織の立ち上げ過程で遭遇する問題をどのように解決してきたのかを中心に、聞き取りを実施した。

2. 2. 1　これまでの取り組みの経緯

2001 年から「バリアフリー委員会」と名称を変え、ボランティア的な学生組織だったものから、専門の教職員も関わることで本格的な体制となった。2002 年からバリアフリー委員会に大学の予算が付くようになり、PC テイクの取り組みが始まった。2004 年、100 名を超える支援学生の拡大をきっかけに、テイク総括部、学習部、広報部、介助部、交流部、CAR 部（アルミ缶を集めて車いすと交換）の 6 つの部会に分けて役割分担を明確にした。

そして、2010 年 2 月に、大学の組織として“障がい学生支援会議”が設立された。障がい学生支援会議は、副学長をはじめ各部局の部長、バリアフリー委員会代表職員・事務担当などで構成されており、現在は 2 ヶ月に 1 回開催されている。この会議で、大学全体の学生支援体制を把握し、大学としての方針を決定したり、部局間の連携をはかっている。その後、2012 年 8 月から障がい学生支援担当の事務職員が配置（兼務）され、支援学生やしょうがい学生への相談対応、活動支援、事務処理を行っている。

2. 2. 2　バリアフリー委員会の取り組み

(1) 全体構成

バリアフリー委員会は「バリア無き大学をめざし、しょうがいを抱えた学生と共に取り組み、共に歩く」を目標として掲げており、上述の 6 つの部会から構成されている。現在部員は 101 名であり、各部会が役割分担しながら支援活動を行っている。たとえば、ノートテイク、PC テイク、手話通訳、字幕挿入の活動があるが、他にも肢体不自由学生の登下校や移動の介助などがあり、活動内容は豊富である。学生主体の活動であり、相互の信頼関係の上に成り立っている。支援者・被支援者双方にとって、安心できる場、失敗できる場、学べる場となっている。

(2) 委員会の運営

支援学生の技術養成・理解促進として、月 2 回のテイカー養成講習会、毎週金曜の講義後に行われる手話勉強会、夏季手話合宿などがある。PC テイク講習会は、初心者とベテランの連携入力で練習を行っており、授業における実際の活動と講習会の差が大きいという課題があることから、教

員に参加を求めて模擬授業も実施している。講習会には当事者の学生も参加してアドバイスをし、伝言ゲームを取り入れたりして、正確に情報保障をできるように講習会内容の改善を行っている。

参加者募集ポスターは常時掲示している。さらに、入学時に募集のビラ配り、新学期ガイダンス時期に募集活動を行っており、学生が主体となって作ったパンフレット、CM ビデオ、web ページなどを作成している。“情報保障”という言葉を初めて聞く学生には具体的なことが想像しづらいため、入学式などで実際に PC テイクによる情報保障を行いスクリーンに投影したりしている。

(3) 謝礼金や事後報告

支援学生に支払われる謝礼金は、札幌の学生アルバイト単価（時給 770 円）を基準に計算される。そのため、情報保障活動は、1 講義 90 分で 1155 円（770×1.5＝1155）と設定されている。5、6 時限の場合は、増量（時給 960 円として計算）され、月払いで大学から支援学生の口座に振り込まれる。

活動実績（事後報告）は本学のチケット制とは異なり、支援学生自身が記録簿で管理し、聴覚しょうがい学生の印鑑を得て月末に提出する仕組みである。チケット制に較べ、支援学生・被支援学生いずれの側の負担も軽減されるので、この方式は本学でも取り入れたい。

(4) 課題と今後の取り組み

札幌学院大学バリアフリー委員会の課題の 1 つに、支援学生の不足が挙げられる。2012 年度は聴覚しょうがい 8 名、肢体不自由 7 名、視覚しょうがい（弱視）1 名、その他 11 名となっている。現在の人数では足りず、講義の少ない 4 回生の負担が大きくなっている。また、大学全体の課題として、予算の獲得がある。しょうがい学生を受け入れる私立大学には、私立学校振興・共済事業団から「私立大学等経常費補助金」の増額措置がされている。これまではしょうがい学生に関わる経費が“特別補助”として算出され、各大学への配分に上乗せされていた。しかし、2012 年度申請分からは配分基準に大きな見直しがあり、しょうがい学生に関する増額措置は“一般補助”の中に位置づけられるようになった。この影響により、札幌学院大学では年間 500 万円あった補助金が 360 万円に減った。そのため、しょうがい学生に関わる経費を大学が独自で負担しなければならないようになった。学内での予算獲得は困難を極めており、今ある予算内でどのようにやりくりしていこうか検討中であるという報告があった。

2. 2. 3　サポートデスク字幕班の活動

(1) サポートデスク

札幌学院大学の電子計算機センター内に、バリアフリー委員会とは別に、“サポートデスク”という学習支援のための学生組織がある。13 名の学生スタッフと 6 名の職員で構成されている。年 2 回スタッフ募集を行い、職員の面接によって選考される。学部、学年はさまざまで、字幕班の 4 名は異なる学年だった。サポートデスクでは主に情報教育関連授業の支援、PC を使う講義の相談やビデオ教材への字幕挿入サービスを行っている。字幕挿入サービスは 2008 年から試行的に開始され、現在はバリアフリー委員会や聴覚しょうがい学生と連携しながらサービスを提供している。

(2) 字幕班の作業工程

実際に電子計算機センターへ行き字幕挿入の作業工程を見学した。使用ソフトは「CAMTASIA STUDIO」である。字幕作成マニュアルやルール・マニュアルがあり、表現や表記方法、作業工程を統一して字幕の質を保つ努力がなされていた。そのため、どの学生が行なっても同じような表記方法になり、見る側にストレスを与えず、見やすいものになっている。また、字幕ルールが作成される以前に比べても、効率的になり、作業をする学生の負担も軽減された。これらの支援活動を継

続的なものにしていくために、教員への周知や職員との協働の必要性が挙げられていた。

2. 2. 4　まとめ

札幌学院大学は、学生数や教職員数、大学入試における位置づけが大阪大谷大学とよく似ている。しかし、しょうがい学生の支援体制では、教職員も交えた大規模な学生組織で役割分担が明確になっており、本学とは大きく差があるということが判った。また、バリアフリー委員会とサポートデスク字幕班が互いに連携して情報保障を行っていた。本学でも、情報保障と字幕付けは別々の組織に特化して、連携し合う方がよいのではないかと考えた。ただ、そのためには支援学生が100名以上必要である。我々も支援の輪を広げ、学生組織を立ち上げ継続的に活動できるようにする必要があることを痛感した。

2. 3　宮城教育大学訪問

2013年2月20、21日の日程で訪問した。しょうがい学生支援室の室長である松崎丈先生をはじめ職員の方々にインタビュー調査を行った。また宮城教育大学と本学の学生親睦会を通じて、学生主体で行っている聴覚しょうがい学生と支援学生の情報交換会や練習会の様子を知り、本学でも活用できることを学んだ。

2. 3. 1　しょうがい別の部会の立ち上げ

宮城教育大学の支援体制の特徴は、しょうがい別に担当部会があることだ。現在は、視覚しょうがい部会・聴覚しょうがい部会・肢体不自由部会・発達しょうがい部会の4つの部会である。自身が抱えるしょうがいがこの4つ以外であるとき、しょうがい学生は自発的に申し込みをし、部会を立ち上げることで支援が始まる。各部会の会長は、そのしょうがいを研究している大学の先生が兼任している。

2. 3. 2　しょうがい学生支援室

室長・専門部会長・職員・ボランティア学生によって運営されている。特に職員は、この支援組織にかつて所属していた同校卒業生がコーディネーターとして常駐していて、支援シフトの調整、講義で使用するパソコンの準備、手話通訳などを行っている。

支援室の壁一面に、聴覚しょうがい学生と支援学生の名前と役職名が、顔写真とともに貼られていた。ペアを組む相手の顔と名前が分かることで、テイカー同士、または支援をする側・受ける側の持つ不安が軽減されるとの説明があった。

2. 3. 3　ノート型パソコン50台完備

パソコンにはあらかじめ、授業で使われる専門用語を登録し、PCテイクをスムーズに行えるように工夫。授業により専門用語は異なるため、パソコンも授業別に使い分けている。連携入力に必要なPCテイクセットとして、ACアダプター、電源タップ、LANケーブル、HUBとPC2台が袋に入った状態で管理されていた。また、遠隔地からパソコンテイクができる遠隔地通訳室もあり、これは東日本大震災の際に、大いに役に立ったということである（注：PEPNet-Japanが連携大学に声をかけて実施された。宮城県内4校の聴覚しょうがい学生に対して、同志社大学、群馬大学など13大学から週20コマの支援が実施された。）

2. 3. 4　支援学生募集方法

入学式でのビラ配りや、オリエンテーションでPRを行っている。ノートテイクが具体的にどういうものかが分かりにくいという学生には、実際にノートテイクを行っている現場を見てもらう。また、同大学が独自に製作したCMで、聴こえないとはどういうことか、それを支援するということはどういうことか、ということを学生に伝え、支援学生になってほしいと訴えている。

2. 3. 5　まとめ

室長の松崎丈先生は、情報保障のなかった頃に学生として同大に在籍し、周囲の学生に自ら支援

を依頼して日々の講義を受けたと語られた。そのような学生時代を経て卒後研究者となり、教員として同大に戻ってきてからはしょうがい学生支援の充実に尽力しているという、極めて稀な立場の教員である。そのため、当事者として、研究者として、教員として、様々な視点からしょうがい学生支援のスタンス、広報についての示唆を得ることができた。

2. 4　大阪教育大学訪問

手書きノートテイクでは話者の音声情報の20％ほどの情報しか聴覚しょうがい学生に提供することができない。情報保障をより精度の高いものにしていくために、昨年からパソコンテイクを導入し始めた大阪教育大学に調査を行った。実際に我々がパソコンテイクを体験し、パソコンテイクではどのような利点が得られるのか、具体的な導入方法などの調査を行った。同大学の「パソコンテイク講習会」に参加する形で行われた。この講習会は大阪教育大学障がい学生修学支援ルーム所属の学生スタッフ、パソコンテイク研修担当者の企画で行われた。

情報保障体制、パソコンテイクを行うにあたってどのような準備をすれば良いのかについてのプレゼンの後、それを踏まえて二人一組で一人一台のパソコンを用いてテイク実践を行った。

2. 4. 1　情報保障体制

大阪教育大学では、1990年ごろに1人の聴覚しょうがい学生が入学して以来、聴覚しょうがい学生が次第に増加するにつれて、情報保障活動が活発になった。そして、特別支援教育講座から学長に申し入れが行われたことで、2012年度に『障がい学生修学支援ルーム』が設立された。『障がい学生修学支援ルーム』は、ルームスタッフと学生スタッフで運営している。ルームスタッフは、ルーム長1名、コーディネーター1名、職員2名で構成されている。学生スタッフも責任者・調整担当（シフト調整・報告書管理等）・研修担当（各講習会の企画・進行）・交流会担当（大学内外の交流会の企画）に分れており、それぞれの役割を担って動いている。

2. 4. 2　支援協力学生の役割と支援プロセス

大阪教育大学では、しょうがいのある学生を支援する学生のことを「支援協力学生」と呼んでいる。その協力支援学生には3つの役割がある。①講義やガイダンスでの情報保障（PCテイク／ノートテイク／手話通訳）、②視聴覚教材の文字起こし、③視覚サポート（視覚しょうがいのある学生の支援）があり、1コマ1500円の謝礼金制度で運用されている。また、支援までの過程は、主に支援ルームと調整担当が中心になって動いている。まず、支援協力学生の空きコマ、被支援学生の支援が必要なコマを互いに専用のソフトに登録する。それを支援ルームと調整担当が調整してシフトを作成して、支援者と被支援者に連絡を取る。もし支援者の急な欠席や変更があった場合はメーリングで対応する、という流れで実施されている。

2. 4. 3　パソコンテイク講習会

(1) パソコンテイクとは

聴覚しょうがい者への情報保障手段の1つである。パソコンに入力した文字を聴覚しょうがい学生に提示することが可能で、複数台のパソコンと専用ソフト「IPtalk」を使用する。入力は2名で連携して行う。熟練者になれば発話の80％もの音声情報を文字化・提供することができ、活字で見やすくテイクデータが扱いやすいなどがある。

(2) 機器の接続

有線接続と無線接続の2種類の接続方法がある。共通でパソコンと電気コード、OAタップを必要とする。有線接続ではLANケーブルなどがさらに必要となる。体験時は2台のパソコンでの有線接続行った。その2台のIPアドレスをそろえることにより、「IPtalk」使用時の準備が完了と

なる。

(3) IPtalk の使い方

2 台で連携入力をするための設定をまず行う。選択タブで上級者用（全機能）を選びパートナータブを選択する。「なってよ！」をクリックする連携入力が可能になる。「IPtalk」の画面に「モニター部」というものがあり、そこに相手の入力情報が表示される。修正したいときには、F 9 キーを使用するかワープロモードにして直接書き換えるかの 2 通りである。詳細設定では Fn キーにメモを登録したり、表示画面の色・文字を変更したりすることも可能である。

(4) タイピング速度向上

パソコンテイクをするにあたって、タッチタイピングスキルが必要不可欠である。具体的なタイピング速度としては 4 key/sec 以上が望ましい。

2. 4. 4　考察とこれからの課題

大阪教育大学へのパソコンテイク調査を経て、最初に述べた本学での情報保障をより良いものにできるヒントが得られた。ノートテイクでは、20％の音声情報しか文字化できないことを最初に述べたが、パソコンテイクでは約 80％ もの情報を提供できることがわかった。我々は、支援を必要とする学生により多くの情報を提供することを目的とするため、ぜひとも情報量の多いパソコンテイクを導入していきたい。

しかし、パソコンテイクのためにはパソコンとの接続機器が必要である。また、ノートテイクからパソコンテイクに移行していくことでこれまでのノートテイカーに不安が生じることも考えられる。ノートテイクはペンと紙があれば誰でもすぐにできるというのが利点であるが、パソコンの場合、タイピング速度の遅いことを不安に思う学生が出てくるかもしれない。その対策にはタイピング講習会が効果的である。情報保障メンバーを中心に、本学のパソコン教室を放課後に活用し、タイピング・スキル向上を目指した練習体制をつくっていきたい。

大阪教育大学の積極的な情報保障体制に驚愕した。これからも他大学の情報保障活動を知る必要があることも実感した。新しい情報保障体制を学び、本学でも取り入れていきたい。我々は支援を必要とする学生のニーズにあった情報保障を提供していくという目的を忘れてはならない。他大学で学んだ知識や経験を踏まえこれからの情報保障活動に力をいれていきたい。

3. 全体のまとめ

訪問先ごとに述べた内容を表にまとめ、各項目について本学の現状と比較しながら今後の活動について述べる。

表 1　テイク方法と支援学生の人数（学生数“－”：調査時点で正確な数を把握できなかったことを示す）

	しょうがい学生（名）	支援学生（名）	テイク方法
札幌学院大学	27	101	ノートテイク・PC テイク・手話通訳
宮城教育大学	12	－	ノートテイク・PC テイク・遠隔操作での PC テイク・手話通訳
大阪教育大学	－	－	ノートテイク・PC テイク
同志社大学	－	－	ノートテイク・PC テイク・手話通訳
日本社会事業大学	－	73	ノートテイク・PC テイク
愛媛大学	17	93	ノートテイク・PC テイク・字幕付け
千葉大学	－	－	ノートテイク・PC テイク・字幕付け

日本福祉大学	−	136	ノートテイク・PC テイク・字幕付け （テイク学生以外の学生サークルがサポートに入ることもある）
筑波技術大学	−	−	ノートテイク・PC テイク・字幕付け 新任の先生や新入生に対する手話指導を行う。 先生には、パワーポイントの活用やレジュメの内容を詳しくするよう伝え、視覚的に情報が伝わるような配慮をお願いしている。

本学には、聴覚 2 名、肢体不自由 3 名のしょうがい学生が在籍している。支援学生の登録は 46 名だが、実際にテイクを行っている学生は約 20 名である。現状、聴覚しょうがい学生に対するノートテイクの支援のみであり、パソコンテイクや肢体不自由を持つ学生に対する支援は行われていない。パソコンテイクが導入されていない大きな理由は、タイピング技術が乏しいことにある。今後の活動として、パソコンテイク導入を目指し、タイピング技術向上のための練習会を開きたい。

表 2　スタッフの募集方法

札幌学院大学	募集ポスター常時掲示・入学時のビラ配り・オリエンテーションで PR パンフレット作成・CM 作成・Wed 作成・テイクの実演・HP 掲載
宮城教育大学	入学時にビラ配り・オリエンテーションで PR・テイクの実演・CM 作成・HP 掲載
大阪教育大学	入学時にビラ配り・オリエンテーションで PR・HP 掲載
同志社大学	新入生歓迎会でのビラ配り・テイクメンバー用のジャージでアピール・HP 掲載
愛媛大学	全生徒にテイカーを呼びかけるメールを送信・HP 掲載
日本社会事業大学	入学時に PC テイク実践・オリエンテーションで PR・HP 掲載
日本福祉大学	入学時のオリエンテーションで PR・HP 掲載
関西学院大学	学内ポスター・教員への周知・HP 掲載 情報保障活動の紹介 VTR の作成（オリエンテーション等で放映） 支援者の養成方法　聴覚しょうがいについての講座・先輩学生による技術向上講座等

本学の実働支援学生数は約 20 名である。この人数では、聴覚しょうがい学生の全時間割をカバーしきれない。そのため、入学時のビラ配り、オリエンテーションでの PR 等を行っている。今後は、表 2 を参考に学内ポスター常時掲示や、HP 掲載、全学生へのメール送信、具体的にテイクとはどういうものかが分かるような CM 作りなど、できることから少しずつ行動したい。

表 3　ノートテイカー育成方法

札幌学院大学	テイカー養成講習会・手話勉強会・手話合宿・PC テイク講習会 ゲーム等も企画し、しょうがい学生と支援学生が楽しみながら、技術向上を行ったりコミュニケーションをとったりしている。
宮城教育大学	講習会・聴覚しょうがい擬似体験・ディスカッション・他大学との交流
大阪教育大学	タイピング速度向上練習会・講習会・交流会・合宿
同志社大学	昼休みに練習・手話講座・フォローアップ勉強会・キャンプ・外部講師による講演
愛媛大学	ノートテイク、PC テイク、手話の基礎講座・意見交換・他大学との交流
日本社会事業大学	専用のパソコンルームにて、空き時間に練習ができる。 練習会は全体で行うものと、少人数で行うものがある。
日本福祉大学	テイクの問題点共有・タイピングや連携入力における準備と片付けの練習

本学では月に一回のミーティングを設けている。連絡事項や、テイクをする際の疑問点・改善点を話し合っている。今後はテイク練習やパソコンテイクの練習・講習会も設けていきたい。また、簡単な単語から手話を覚えて、しょうがい学生と手話でコミュニケーションをとる楽しみも学んで欲しい。

表 4　コーディネート（主にシフト表作成を指す）の方法

愛媛大学	職員が行う。テイク募集メールを支援学生に送る。
日本福祉大学	職員が行う。半期で固定シフトを原則としている。

多くの大学では、コーディネーターといわれる、しょうがい学生のサポートをする職員がいる。彼らは主に、しょうがい学生と支援学生の時間割の調整（シフト作成）を行ったり、パソコンの管理などを担当している。本学では支援学生のシフト作成係が、支援学生全員の空き時間を調査し、シフト作成を行っている。これには大変な時間を要する。聴覚しょうがい学生が今後増えれば、負担が大きくなると考える。

本学では、テイクをした支援学生はその証拠となるチケットを、しょうがい学生から受け取り、それを一ヶ月ごとにまとめて学生課に提出するという方法をとっている。この方法ではチケットを無くしたり、チケットに名前を書かなかったりと問題が多い。また、シフト表とチケットを照らし合わせる作業も、複数の箇所を同時に見る必要があるため時間がかかる。そこで、札幌学院大学が行っている記録簿制を、導入したいと考えている。A 4 の紙に、テイクした人の名前・テイクした日・授業名・しょうがい学生のサインを書いていくというシンプルなものである。これなら A 4 一枚で収まりバラバラにならず、小さな紙で無くしてしまうリスクの高いチケット制よりも安心である。さらに、シフト表と照らし合わせる作業でも、ひとり一枚の紙で済むため、効率的である。今後、学生課と相談して変更依頼を働きかけていく。

4. 謝　辞

本調査研究の実施にあたり、「大阪大谷大学志学会会員学生企画研究活動助成金」の支援を受けました。また、24 年度の教育福祉学部卒業生橋本良子氏（現、堺聴覚特別支援学校教諭）には、本グループのリーダーとして訪問先大学との連絡・調整・手話通訳と多くの面で尽力していただきました。ここに感謝の意を表します。